グリフィスの遺稿

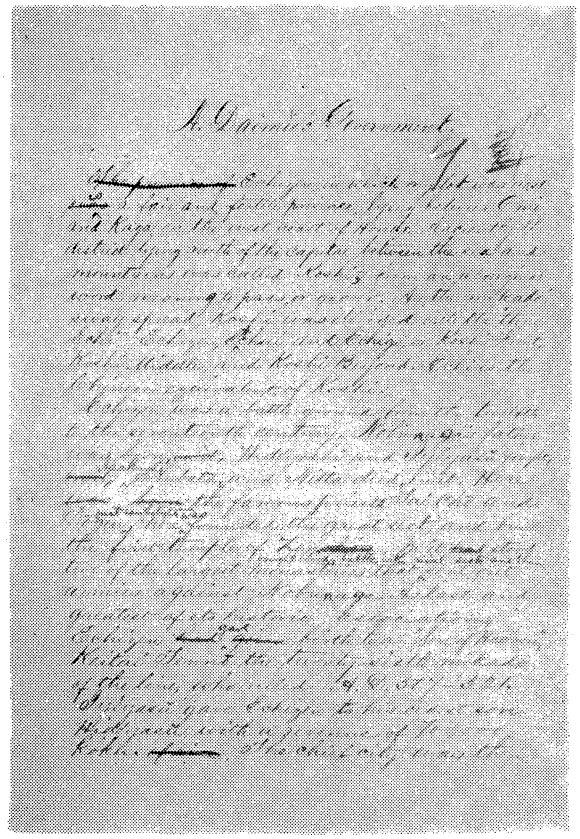
杉原丈夫

グリフィスは一八四三年九月に生れ、一八六五年ラトガーズ大学に入学した。在学中彼はアメリカに初めて留学してきた二人の日本人学生のために家庭教師をした。これが彼の一生を決した。卒業後彼は福井藩の藩校明新館に招かれ一八七〇年十二月（明治三年）来日した。一年近く福井に滞在した後、東京開成学校（後の東京帝国大学）の講師になり、一八七四年帰国した。

以後彼は日本に関し多数の著書、数百の論文をあらわし、三千回の講義を行なつた。一九二八年二月彼は死去した。彼の遺言により、彼の蔵書、切抜き、原稿、パンフレット、メモ類がラトガーズ大学に寄贈され、いまグリフィス集書となつている。

グリフィス集書は二十九の箱に収められている。そのうち二十一は日本に関するもの、四が朝鮮、三が支那、一がその他である。集書は、グリフィスのノート、手紙、論文（刊行および未刊行の原稿）、他の著者の論文、数千の切抜きを含んでいる。

彼のノートや原稿の大部分は彼の著書に取入れられている。従つて我々にとつて興味のあるのは、彼の未刊行原稿である。一昨年夏ラトガーズ大学からバークス氏が福井大学を訪ねて来られた機会に、グリフィスの未刊行原稿三編をマイクロフィルムにして福井大学に送つてほしい旨ラトガーズ



「大名の政府」の最初の１頁

大学に要請した。

この申出は幸にして満たされ、昨年秋ラトガーズ大学からフィルムを送つてきた。いま福井大学附属図書館が所蔵している。三編の未刊行原稿とは次のものである。便宜上題名を邦訳しておく。

「大名の政府」十七枚。福井藩の政治機構等について書いてある。

「あとがき」四十二枚（全四十七枚のうち五枚欠けている。）なにかの著書の最終章に当てるつもりのものであろう。日本における最初の印象が述べられている。

「日本人の階級」十五枚。彼は日本人を九階級に分類している。

これらは近く邦訳して発表したいと思つている。なお本稿におけるグリフィス集書に関する部分は「アジア研究雑誌」第二〇巻第一号（一九六〇年十一月）に、バークス氏およびクーパーマン氏の連名で報告されているものによつた。